

イノベーションに地道に取り組む  
小さな会社の四年とちょっとの記録



アニュアルレポート  
2025



UCILab. 合同会社



はじめに

会社について

UCI Lab. とは

メンバー

大切にしている3つのキーワード

プロセスについて

第4期（24.9－25.8）の活動

公開プロジェクト

これまでの公開プロジェクト

研修や露出実績など

地道に取り組むイノベーション

おわりに



## 「こたえを一緒につくる」旅のチケット

今年も私たち UCI Lab. (ユーシーアイラボ) の活動に温かい支援をいただき、本当にありがとうございました。

2025 年もたくさんの知的好奇心が詰まったプロジェクトに携わることができました。つながる皆さんも民間企業だけでなく社会福祉協議会や NPO 法人など多彩に（「生活」により近く）なっています。

また、短期的な課題解決型ではなく伴走型で関わり続けることがもたらす効能も、より具体的な手応えとして実感しています。

生成 AI によって要約されたカラフルなチャートがあふれ、用意された考察を消費するこの頃。知識や答えへの最短ルートが整備される一方で「知っただけではイノベーションにはつながらない」ということもまた事実です。

思えば、私たちが日々生活を営む現場は、そもそも要約の素材として言語化されていない（できない）複雑な文脈に満ち溢れています。そのような「ある行為を取り巻くシステム」全体を捉えるためには、一見面倒くさい対話と協働のプロセスこそが重要です。

一緒に生活者の現場に行き、一緒に悩み、一緒に考える。その過程でふと芽生える小さな「ひょっとして」が、システム全体を理解し共有する MAP や地に足のついたアイデアに育つのではないのでしょうか。

それは、あらかじめ明確な課題や答えが用意されていない、時間がかかる地道な取り組みです。それは同時に、まるで仲間と知らない国を旅するように、楽しく、忘れ難い時間でもあります。

2026 年も、皆さまと「こたえを一緒につくる」旅で一緒にできることを、UCI Lab. 一同とても楽しみにしています！

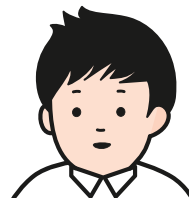
2025 年 12 月

UCI Lab. 合同会社 所長・代表 渡辺隆史



会社名	UCI Lab. 合同会社
業態	調査企画会社
主な業務	クライアントのイノベーションに関わるプロジェクトの設計と実施 ・ 定性調査（フィールドリサーチ、デプスインタビュー）、定量調査 ・ コンセプト創造 ・ 事業戦略策定 ・ コミュニケーション戦略作成と具体的展開 ・ （プロセスにおける）ワークショップ など
主なクライアント	メーカーなどの商品企画・研究開発・新事業開発部門
設立経緯	2012 年 9 月 株式会社 YRK and 内の 1 チームとして誕生し、 2021 年 9 月 21 日 グループ会社として独立分社化

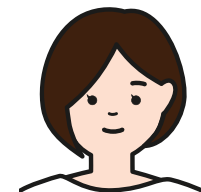
#### メンバー



イノベーション  
オーガナイザー



共感リサーチャー



包括的支援者



UCI Lab. のロゴは、  
中心にいる生活者を起点にして、  
多様な人々が対話的に協働することで、  
新しい価値を結晶化するプロセスを  
表現しています。



## UCI = User Centered Innovation

(私たちが定義する)

### イノベーション

新しい価値が創造されて、社会や生活の中で受け入れられること

### イノベーション・パートナー

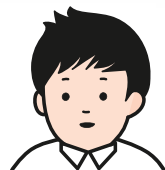
ビジネスなどの現場で

「今までと違う考え方で新しい何かを生み出そうとする」ときに、  
その組織にとって必要な支援をおこなう

UCI Lab. は、2017 年に自分達のありたい姿を対話を通じて見える化した「envision」を策定し、その中で、チームに必要な役割を「まとめる人」「共感する人」「支える人」としました。

「まとめる人」

渡辺 隆史



代表・所長

イノベーションオーガナイザー

国際関係学部卒業後、マーケティングプランナー / リサーチャーとしてキャリアをスタート。社会人大学院での学びや縁をきっかけにメーカーの新事業開発の支援を開始し、2012 年社内起業として UCI Lab. を立ち上げ。ラボでは司令塔的役割を担う。プロジェクトの引き出しを増やすために、不思議なアンテナを張り巡らせて、人類学や演劇など、様々な分野に越境し公私混同で独学・交流し仕事にしてしまう。多彩な方々との実践に巻き込む／巻き込まれることを通じて、ラボを学び続ける組織にしています。

著書として『地道に取り組むイノベーション』（共編著、ナカニシヤ出版）。

経営修士（専門職）、  
事業構想大学院大学非常勤講師

「共感する人」

大石 瑤子



代表補佐・

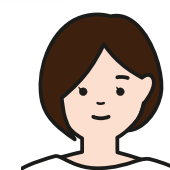
共感リサーチャー

チーム内では共感リサーチャーとして主に生活者理解（定性調査など）を担当。人の心理やコミュニケーションに強い関心があり、大学ではエスノメソドロジー（相互行為論）を専攻、その後 NLP やワークショップデザイナーの資格を取得。学生時代は年間 100 本以上の映画を鑑賞、現在は 2 日に 1 冊ペースで小説を読む物語好き。インタビューも相手の環境や価値観、経験があらわれる物語として興味深く読み解いています。

全米・日本 NLP 協会認定マスタープラクティショナー、  
LAB プロファイルプラクティショナー、ワークショップデザイナー、Scrum Inc. 認定資格スクラムマスター

「支える人」

松浦 はるか



包括的支援者

（バックオフィス業務・リサーチアシスタント）

外資時計メーカーや菓子メーカーなどでマーケティングを経験したのち、コンサルティングファームのリサーチ部門でアシスタントを経験。発信することよりチームを支えることに適性や喜びを感じていた頃、縁あって UCI Lab. へ参加しました。

独立分社化を機にバックオフィス全般を担当することになり、日々、経理や労務の勉強に奮闘中です。



生活者起点

対話的協働

ケア & クラフツ



## 生活者起点

### 対話的協働 ケア & クラフツ



私たちの掲げる User Centered＝生活者起点とは、使う人たちを主人公として捉えるということ。私たちは、その主人公が居る現場でドキュメンタリーのように寄り添い、生活者から見える世界や経験する物語を、共感的にわかろうとすることを大切にしています。もし生活者起点ではなく企業起点でプロジェクト側の仮説から始めてしまうと、生活者や現場を調査しても、知りたいことだけを聞き、見たい部分だけを見て、駒のように動

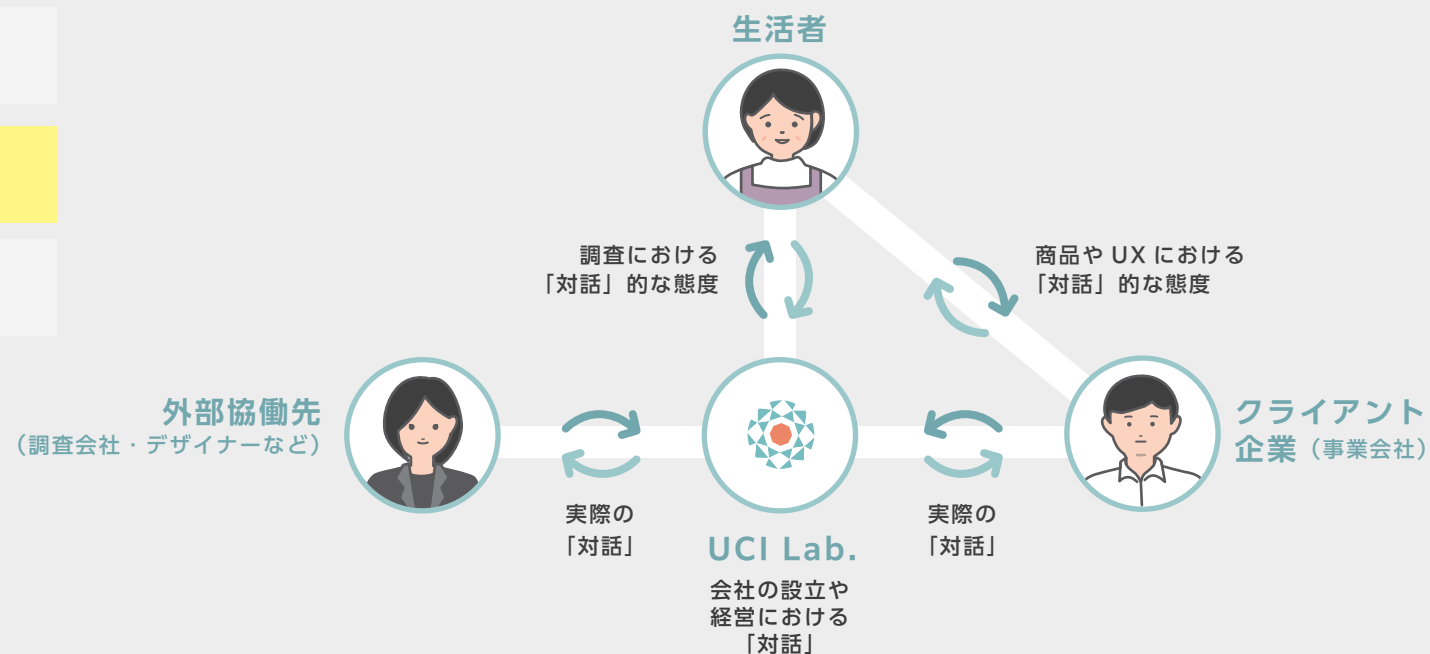
かそうしてしまうかも知れません。プロジェクトの出発点に生活者を迎え入れ、彼らからみた景色と取り巻くシステムを、まずは企業側が有りのまま受け止める。そこから、主人公たちの経験がもっといきいきするための「地に足のついた問い」を立ち上げる。この順番をととても大切にしています。



生活者起点

対話的協働

ケア & クラフツ



私たちは、対話を平田オリザさんの説明などから「お互いの違いを尊重しながら議論をすることで、全員が納得できる方向性を見出したり新しい答えを生み出したりするプロセス」と定義しています。つまり、対話とは、自分自身の認識や行為の変容も伴う、ときにツラく面倒くさいものです。UCI Lab. では、これをあらゆる場面で実践しようとしています。いかにも対話的な生活者へのリサーチだけでなく、プロジェクトやワークショッ

プの設計や運営にも、プロトタイプの UX（ユーザー体験）や、最終的にそのイノベーションの提供価値にも、よい対話が成立していてほしい。実は、私たちの組織内部でも、法人設立プロセスや日々の運営において対話的協働を実践しています。それは、いま注目されつつある「協同労働」という働き方にもつながっています。

生活者起点

対話的協働

ケア & クラフツ



ひとつひとつのプロジェクトを大切に、他ならぬそのフィールドと真摯に向き合い、何度も試行錯誤し対話しながら、地道に何かをつくっていく。それには、手法やツールの問題ではなく、工房でのモノづくりのようなプロセスが大切だと考えています。

これまでと同じ方法では生まれない価値を目指したはずなのに、気づけばイノベーションさえ効率的に量産しようとして、大きな構想が単に大味な

仕上がりになっている。そんな残念なことが起きていないでしょうか。企業側の都合でファストにつくられたペルソナやシナリオでは抜け落ちてしまう「人間味」の部分、私たちは互いを気遣い助け合うケアの倫理から満たしたい。丁寧に時間をかけて、血の通ったイノベーションの実現を目指しています。



## 全体の企画設計

UCI Lab. では、あえてパッケージ化をしていません。個別のご相談に沿って、課題を対話的に整理し、最適な設計を行います。

## プロジェクト導入

調査に入る前に、現状の企業側の認識や仮説をメンバー間で共有します。  
パイロット調査などから、ユーザー側とのズレの存在も可視化します。

## 共感醸成リサーチ

デプスインタビューやフィールドワークなどで「こちらが知りたいこと」以外の文脈まで含めて受け取ります。膨大な情報の中から根気強く解釈を重ねることで、地に足のついた問いを生成していきます。

## アイデアの創造

問いに基づき、手を動かしたりアナロジーを用いることで、創造的に解いていきます。  
プロトタイプとしてモノや体験が見える化することで、生活者と対話を重ねながら進めます。

## ビジネスモデル化

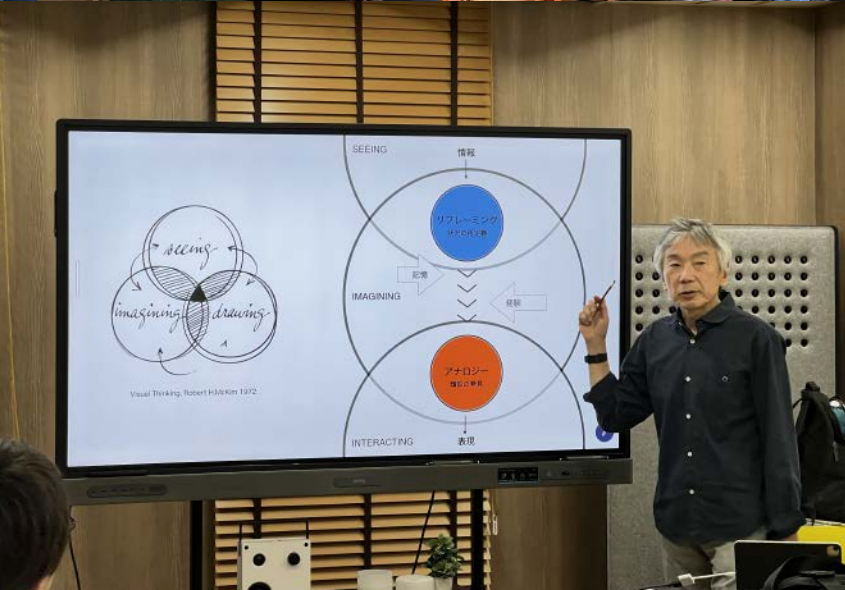
実証実験などを通じて、精度アップし価値体験の細部まで検討します。  
定量的な評価も含めて、企業の視点からも成立するよう事業計画を作成します。



## プロジェクトはワークショップを中心に進行します >>>

- ・ 1プロジェクトに6-10回を目安に実施されます
- ・ テーマや進捗に応じて都度設計し運用されます
- ・ お茶菓子が充実しています





常時4～8件の  
プロジェクトを同時進行  
で進めています

3年以上継続中  
のプロジェクトも

## 第4期、17のプロジェクトに携わりました

創設以来の合計  
(12年間)

定性インタビュー件数

1,175人

毎回別内容!

ワークショップ

325回

### 内 容

取引部門 新事業開発、商品企画、マーケティング、大学IR室など

テーマ コミュニティ、防災、リフォーム、医療、施設接客など

開発対象 デジタルソリューション、サービスデザイン、  
MR (Mixed Reality) 型コミュニケーション、家電 など



## 2025 年～（現在） 「みんなでつくる『ふたごハウス』」 プロジェクト



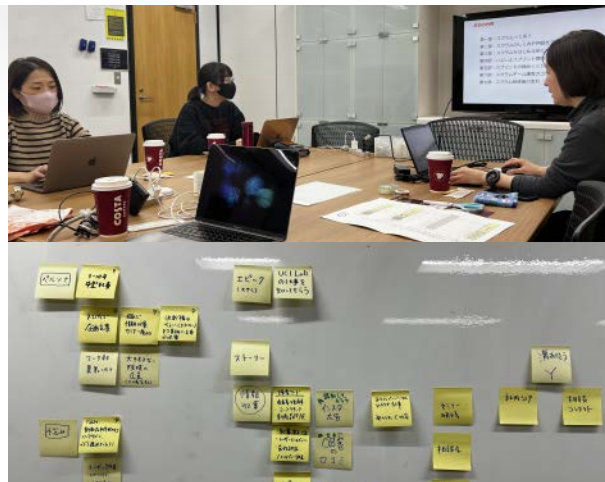
兵庫県尼崎市に NPO 法人つなげが運営する、多胎児家庭のママパパが集い、交流したり相談できる居場所『ふたごハウス』があります。

多胎児のママパパが孤立せず、健やかな育児をするためにはどのような場のあり方が望ましいのか、また持続可能な場であるために運営側はどのように関わるべきか。

UCI Lab. は、渡辺が担当していた社会人大学院での授業「フィールドリサーチ」をきっかけに、プロボノとして参画しています。

大学院授業でのリサーチ結果や、その後の利用者座談会を経て見えてきた課題を整理しつつ、現在は同法人理事である神戸大学の内田浩史先生のゼミと一緒に分析作業やプロトタイプングを進めています。

## 2025 年 「スクラム」の導入



創業 5 年目間近のタイミングで、新しい働き方・連携の仕方を模索するためにスクラムを導入しました。

これまでそれぞれの専門性を活かして業務を分担する体制だった UCI Lab. は、「無駄な打ち合わせはなくす」「フレックスを導入し、時間で縛らない」といった個人を尊重する仕組みで運用し、働きやすさを実現してきました。

一方で、個別性が進むことで特定のメンバーの業務負担が大きくてもなかなかサポートに入れなかったり、メンバーの体制変更がありより密な連携が必要になりました。

そこで腰を据えて「スクラム」の仕組みを導入。

まだまだ試行錯誤の日々ですが、チーム内の対話が活発になったり、協働のきっかけがたくさん生まれるようになってきています。

## 2021 年～（現在） 「避難所の衛生ストレス」解決 プロジェクト



パナソニック様と京都工芸繊維大学 畔柳（櫛）研究室と取り組んできたこのプロジェクトは、これまで見落とされがちだった“にのいのストレス”を丁寧に扱い、少しでも避難生活を心地よくしたい。そんな思いから生まれました。

数年に渡るフィールドワークや共創デザインを経て形になった2つのプロダクトの肝は普段の暮らしでも気軽に使うことでいざという時に使えるものであること。

そのため、クラウドファンディングを実施し、“いつも”と“もしも”のどちらの時にも人が集う全国の子ども食堂やプロジェクトにご協力いただいた広川町の福祉施設へプロダクトを寄贈しました。

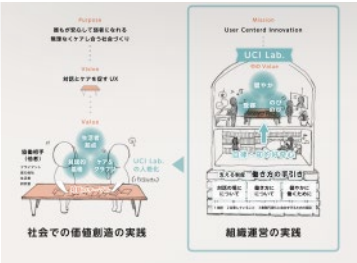
この活動は社会的にも意義のある取り組みと考え、引き続き形を変えて継続しています。

2023 年 ～（現在）  
大阪国際大学「教学ビジョン 2030」  
プロジェクト



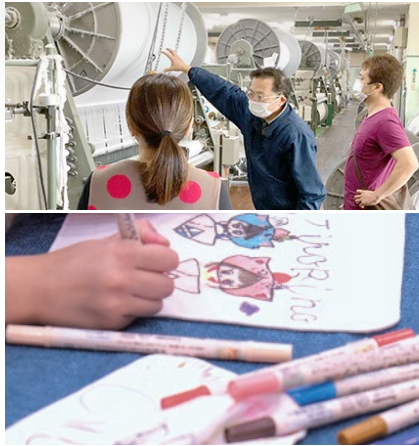
「学生にとっての望ましい  
学びの場」のビジョン策  
定に参画した本プロジェ  
クト。「学生の学び」を可  
視化した LJM (learner  
Journey Map) を軸に、  
現在も改善アクションに  
取り組んでいます。

2023 年  
「働き方の手引き」作成  
プロジェクト



対話を掲げる UCI Lab. が  
1 年をかけ、「対話」によ  
ってつくり上げた「働き方  
の手引き」。その過程で私  
たちを再発見したり、私  
たちの一貫性を表現する  
「UCI Lab. の実践」マッ  
プも生まれました。

2020～24 年  
タオル探求  
プロジェクト



「タオル」からイノベー  
ションは生まれるのか。人  
類学者・比嘉夏子さんと  
ともにフィールドワーク  
を行い、つかい手とつ  
くり手をつなぐ対話  
型プロセスを実施。  
24 年、「タオるペイン  
ティング」が完成しま  
した。

2020 年  
「つくるをわかる」  
プロジェクト



説明が難しい「つくる」  
工程を言語化するため  
の櫛研究室と共同研究。  
リサーチから形になる  
過程を観察し、現場と  
応答し細部に向き合う  
職人仕事（クラフト）  
のような柔軟さと真摯  
さが重要なことがわ  
かりました。

2018 年  
「ジャカルタにおける食と健康」  
リサーチプロジェクト



調査を通じ UCI Lab. と  
比嘉夏子さんの生活者  
理解のアプローチを比  
較。改めて他者理解に  
は膨大な時間と胆力が  
必要なのことがわか  
りました。その後も多  
様な方々との協働を重  
ね、「わかりかた」を  
探究し続けています。

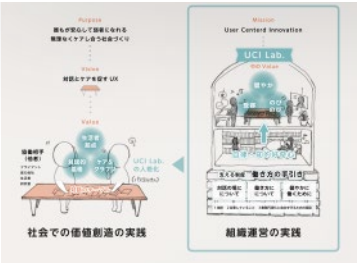


2023 年 ～（現在）  
大阪国際大学「教学ビジョン 2030」  
プロジェクト



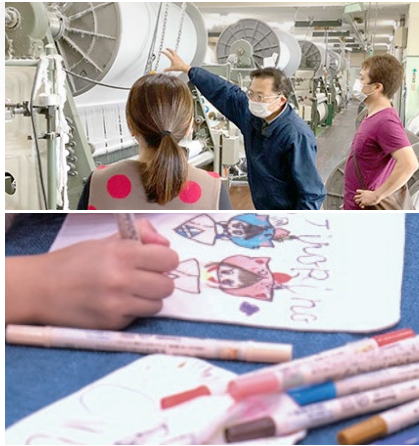
「学生にとっての望ましい学びの場」のビジョン策定に参画した本プロジェクト。「学生の学び」を可視化した LJM (learner Journey Map) を軸に、現在も改善アクションに取り組んでいます。

2023 年  
「働き方の手引き」作成  
プロジェクト



対話を掲げる UCI Lab. が 1 年をかけ、「対話」によってつくり上げた「働き方の手引き」。その過程で私たちちらしさを再発見したり、私たちの一貫性を表現する「UCI Lab. の実践」マップも生まれました。

2020～24 年  
タオル探求  
プロジェクト



「タオル」からイノベーションは生まれるのか。人類学者・比嘉夏子さんとともにフィールドワークを行い、つかい手とつくり手をつなぐ対話型プロセスを実施。24 年、「タオるペインティング」が完成しました。

2020 年  
「つくるをわかる」  
プロジェクト



説明が難しい「つくる」工程を言語化するための櫛研究室と共同研究。リサーチから形になる過程を観察し、現場と応答し細部に向き合う職人仕事（クラフト）のような柔軟さと真摯さが重要なことがわかりました。

2018 年  
「ジャカルタにおける食と健康」  
リサーチプロジェクト



調査を通じ UCI Lab. と比嘉夏子さんの生活者理解のアプローチを比較。改めて他者理解には膨大な時間と胆力が必要なのことがわかりました。その後も多様な方々との協働を重ね、「わかりかた」を探究し続けています。

## 講師

2024 年 10 月 | パナソニック エレクトリックワークス創研株式会社  
「新需要創造のための商品企画—共感編」 研修講師（渡辺・大石）

2024 年 9 月— 2025 年 1 月 | 事業構想大学院大学 大阪校  
「フィールドリサーチ」 授業 非常勤講師（渡辺）

2025 年 6 月— 7 月 | 京都芸術大学  
「VD 応用 2（サービスデザイン演習）」 授業 非常勤講師（渡辺）

2025 年 7 月 | V.School サロン（神戸大学） ゲストスピーカー  
「ユーザー中心のデザインと価値」 ゲスト講師（渡辺）

2025 年 6 月 | 立命館大学院経営管理研究科観光マネジメント専攻  
「ビジネス創造」 ゲスト講師（渡辺）

2025 年 7 月 | パナソニック エレクトリックワークス創研株式会社  
「新需要創造のための商品企画—共感編」 研修講師（渡辺・大石）

## 論文

2025 年 4 月 | 現代文化人類学会『文化人類学研究』 25 巻「「調査者」として関わらないインハウス人類学的実践 — 教学 IR 業務における協働プロジェクトを通じて —」（早川 公、渡辺隆史）

## Web 取材記事

2025 年 6 月 | 日本財団ジャーナル「避難生活のストレス要因「におい問題」。  
産学連携で目指す避難所づくり」





## 地道に取り組む イノベーション

ー人類学者と制度経済学者がみた現場

ナカニシヤ出版 2020年10月

2022年6月  
重版！

UCI Lab. の実践を題材に、今日のイノベーションの現場を、  
所長の渡辺隆史と人類学者の比嘉夏子、制度経済学者の北川亘太という  
立場の異なる著者3名がエスノグラフィックに記述し、  
対話的に思索した野心的著作

イノベーションという言葉の響きからは、斬新で綿密な事業計画，カラフルなオフィスや活発なブレイン・ストーミング，何かが降りてくるような気づきの瞬間といった華やかで知的な印象がつきまとう。しかし，実際の現場でなされていることは，その都度訪れる新たな局面に対して，立ち止まって静かに思索し，ねばり強く対話を続ける地道な営みではないだろうか。本書では，そういった決して洗練されていない側面にこそ光を当ててみたい。

(本書「まえがき」より)



## おわりに

クライアントへの「伴走支援」を掲げる UCI Lab. ですが、2025 年は私たち自身もたくさんの方に伴走していただきながら新しい取り組みに挑戦しました。この場を借りて、お礼と共にご紹介させていただきます。

桑原朋子さんに伴走いただき導入した「スクラム」([チームで協力して仕事を進める働き方の OS](#))は、UCI Lab. にとても深いところで変容をもたらしました。スクラムを通じて「これまでの仕事を協働しやすく」するのではなく「そもそも協働しやすい仕事の設計とは」と根本的に視点が変化したのです。この問いは 3 人のあいだで見出されたもの。今はその答えを業務の中で試行錯誤して探る、二重の協働に取り組んでいるところです。

「[働き方の手引き](#)」で定めている「対話テーブル」を 9 月からスタート。有限会社人事・労務さまに伴走してもらいながら、評価と報酬について、私たちらしいあり方を対話を通じて構築していきます。

UCI Lab. 公式 note の記事執筆には「パーソナル編集者」の[みずのけいすけさん](#)に、原稿のテクニカルな部分から企画執筆の進め方で教えていただき、ときに一緒に悩みながら半年間伴走していただきました。

さらにパーソナル編集者さままでのご縁から、イラストレーターの[ユウコチカさん](#)にお願いして、UCI Lab. の会社案内をポストカードで作成してもらいました。私たちのお仕事の始まり方はすでにご一緒している方からのご紹介が多いのですが、初めての方へ「こんな会社だよ」をひと言で説明してもらいにくいのが悩み



でした。

ユウコチカさんには、“「伝えたい」ことをくみ取り、ぐぐぐと伝わるイラストを描きます”という SNS プロフィールの通り、私たちの説明を根気強く聴いてくださり、本当に伝えたいことに絞った、それでいて細部までこだわりが詰まった、とても素敵なポストカードが完成しました。

これからお会いする方にお配りしますので、ご笑覧ください。

小さなチームの私たちがこれからも地道な取り組みを続けていくためには、これまで以上に多くの皆様のご支援が不可欠です。2026 年もどうぞよろしくお願いいたします。

お問い合わせはこちらから



UCILab.合同会社

**HP**

<https://ucilab.co.jp/>



**note**

[https://note.com/  
ucilab](https://note.com/ucilab)



**Facebook**

[https://www.facebook.com/  
UCILaboratory/](https://www.facebook.com/UCILaboratory/)



**X: @UciLab50496**